

Mammal Study出版の現状と課題

飯島勇人（日本哺乳類学会・森林総研）

Mammal Studyについて

- 日本哺乳類学会が発行する国際英文誌
 - 特にアジアの哺乳類研究を掲載する（基礎、応用問わず）
 - IF：0.8（2023）
 - 発行数：年4号
 - 論文数：年約30報
 - 受理率：47.3%（2023）
- 運営資金は学会員の会費+BioOne（後述）からの購読料

出版形態

- 冊子体

- 段階的に廃止していく方向

- 電子

- ~2008 : J-Stage
- 2005~ : BioOne

なぜBioOneを選んだのか

- BioOne

- 1990年代：商業出版社による雑誌の包括パッケージ販売、電子化、雑誌の統合が進む
- 上記に対抗するためのSPARC連合が、小規模雑誌を存続させるための包括プラットフォームとして設立
- 2000年代：日本からBioOneに参画する雑誌の窓口となるUniBio Press（現ScholAgora）が参画雑誌を募集

- 海外での存在感を高めたいMammal Study

- J-Stageは英語版もあるが海外における知名度は高くない。レイアウトの自由度もない。
- UniBio Pressが参画雑誌を募集した際に参画を決定
- 学会員の会費で運営されるMammal Studyは、商業出版社による販売と理念がそぐわない。適正な価格で雑誌を販売し、営利を追求しないBioOneの活動方針と合致している。

商業出版社がもたらしたものの

- 研究者にとって利便性の高い電子ライブラリ
 - 複写依頼->紙媒体の入手よりもはるかに高い効率
- 永遠に値上がりを続ける購読料
 - 色々理由はつけてくるが、結局財政収支が非開示である以上意味がない
- 編集部（研究者）の意に反した出版形態の強要
 - Gold OA誌への転換を求められることが多い
 - 全ての雑誌がGold OA誌になれるわけではない



EDITORIAL |  Free Access

Shifts to open access with high article processing charges hinder research equity and careers

John W. Williams, Amanda Taylor, Krystal A. Tolley , Diogo B. Provete, Ricardo Correia, Thaís B. Gu Harith Farooq, Qin Li, Hudson T. Pinheiro, André Vicente Liz, Leilton W. Luna ... See all authors 

First published: 31 July 2023 | <https://doi.org/10.1111/jbi.14697> | Citations: 7

Handling Editor: JBI Editorial Office

学術出版の価値と持続可能性

● 学術出版

- 「科学」という作法に従って得られた「発見」を「論理的」に記述したもの
- 人類の重要な財産であり、万人がその生成に貢献し、利用可能であるべき

● 出版は無料ではできない

● 購読料モデル

- 契約した機関に所属する人間だけが論文を読める（万人が利用可能ではない）

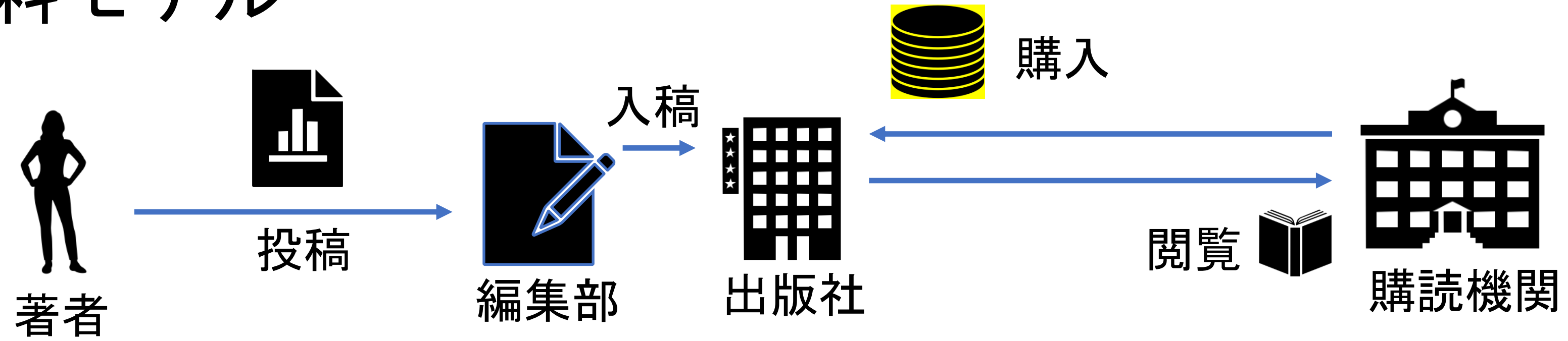
● APCモデル

- 著者が費用（APC）を負担することで、万人が論文を読める（OA）
- 世界的に学術論文の即時OA化を求める動き（plan-S、アメリカ、日本も2025年以降）
- APCの価格は商業出版社が自由に決定し、高騰を続けている（持続的でない）

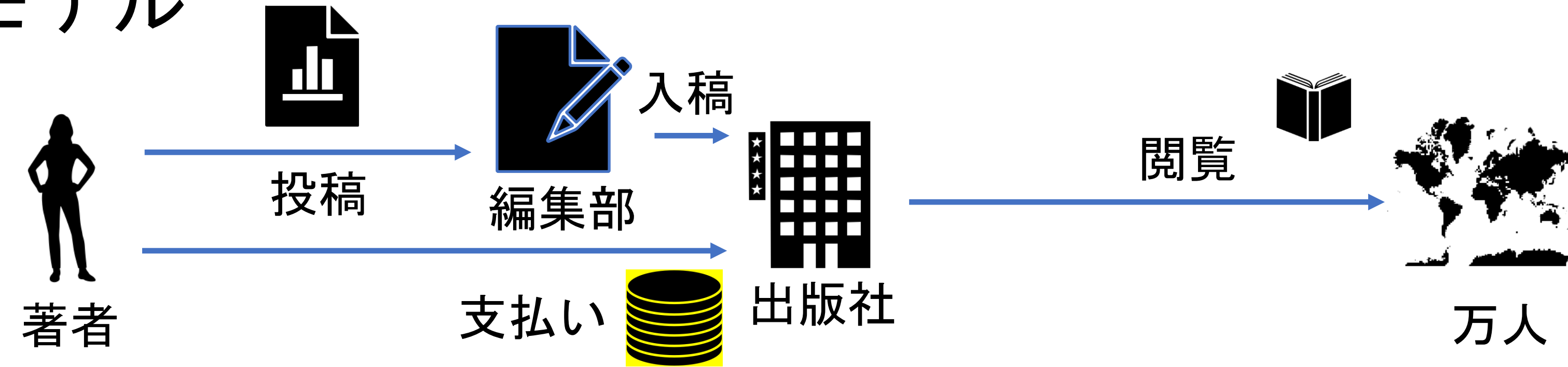
Mammal Studyの選択

- BioOneが提案するSubscribe to Open (S2O)
 - BioOneパッケージを契約する機関数が想定契約数に達した年は、S2Oに参画している雑誌のその年の全論文がOAとなる（翌年以降S2Oが不成立でも、一度OAになった論文はOAのまま）
 - 転換契約の一種で、Annual Review社が最初に導入したとされる
 - 2026～2028の3年間は参画することを決定
 - Mammal Studyは現時点で、選択的OA化を導入済み
- S2Oは学術出版の最終解？
 - フリーライダー問題：S2Oが成立すれば購読料を支払わない機関も論文を読めるため、購読料を支払わない機関が徐々に増える可能性（購読料を支払うメリットはS2O不成立時にも論文が読めること）
 - アクセス性の不安定さ：S2Oの成立不成立は年毎に決まるので、OAとそうでない年が混ざる可能性

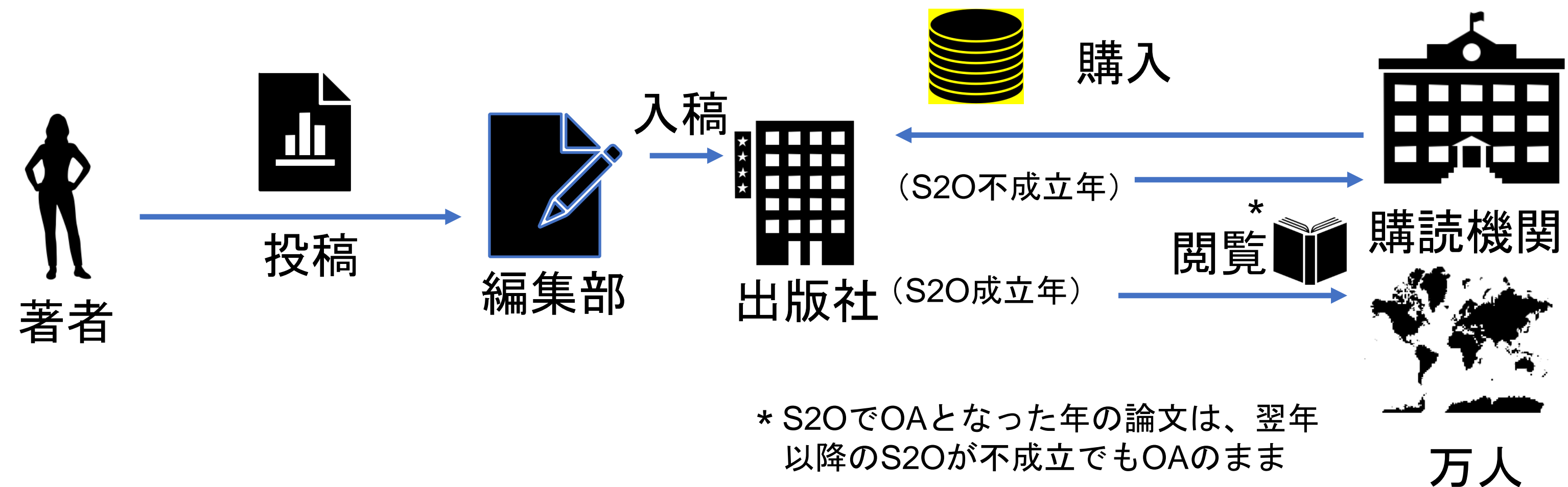
購読料モデル



APCモデル



S2O



* S2OでOAとなった年の論文は、翌年以降のS2Oが不成立でもOAのまま

Mammal Studyの課題

- Mammal Study編集部の希望

- 地に足のついた研究成果を発信できる媒体として存在し続ける
- 運営資金を確保できても、よい原稿が安定的に投稿されなければ雑誌は維持できない

- 投稿数の伸び悩み

- 国内：人口（研究者）は減少し、今後投稿数が大きく増えることは見込めない
- 海外：かつては中国からの投稿が多かったが、最近は少ない（よりIFが高く査読がザルな雑誌に流れている？）
- IFで見られると投稿先としての魅力が高いとは言えない

- 皆さんと考えたいこと

- 研究者の評価のあり方（IFの高い雑誌、論文数という指標に固執することが現状を招いている）
- 学術雑誌の「価値」、「格」とは何ですか？IFが高いことですか？